黃昏　田瑯
荒田　田兵
清街　吳瑛
三遷　戈禾
媽媽記　老龔
鑛金的像（中篇）　李妹
血刃圖（獨幕劇）　李喬
逃婦（獨幕劇）　單憲
蓮居士畢業　蓮客
花皮驛考　金小天
新詩・散文
鄉下人　楊野
五月之吟外二章　吳郎
希望的象徵　崔伯常
河套　許可
愛怨峽　金山龍
我與寂靜與夜・靈魂的獨語　金音
一九三〇年代的文學　馬爾甘・高里
關於日本目前的飜譯界　莫多伽譯
文藝復興時代的美學　紅本彰譯
湖畔詩人華茲華綏（ワーヅワース）　杜德郁譯介

文藝評

雨極　顧盈
平沙　顧盈
山風　陳因
無花的薔薇　陳因

譯文

官能之書　ヴ・ヂイ・ド・ヂ譯

村員們　竹内正一
一杯啤酒　牧之譯
我輩語　T・O・ビーチクロフト　黄河譯

關於雜文　顧盈
我與文學　田瑯
人與文　李喬
漫筆　陳因
關於二輯文選　李妹
編後雜感　秋螢

『藝文志』同人は「讀書人連叢」として『讀書人』『文學人』『評論人』『詩歌人』を出し、文選刊行會では「文選叢編」として『文最』『文潮』を出した。

更に『作風』が出たが、その第一輯は譯文特輯であつた。

その他、單行本がいろいろ出たことは前引文章にある通りである。

第十九章　滿洲文藝家協會結成さる

ここで、滿洲文藝家協會の設立へ移らう。

藝文指導要綱の發表されたのが康德八年三月、その後種々協議を進めて七月二十七日協會の正式設立を見た。

その經過は、協會で出した「來」に次のやうにある。

「我滿洲國の藝文政策は、本年三月政府發表。藝文指導要綱の如く、その確立を見るに至つたが、その後この藝文指導要綱の理念に基き、藝文各界の有志の間に、各その專門藝文團體結成の準備が政府と緊密な連絡の下に進められ、七月五日、先づ滿洲劇團協會の誕生を見るに至つたが、我滿洲文藝家協會も六月以來、山田清三郎、大內隆雄、宮川靖、古丁、筒井俊一、樣本捨三、逸見猶吉、山崎未治郎等の有志が、武藤弘報處長、中島同參事官、礦部同係員と數次會合、政府肝煎りの下に、團體の設立の準備にとりかゝつたのであるが、七月二十七日國務院講堂に開かれた弘報處長招集による滿洲

電話二一三三八二振替新京二一〇

文藝家協會設立會議によつて、即日、本協會の創立を見るに至つたのである。設立會議は、弘報處長より招集を受けた全滿各地（關東州を含む）の文藝家（作家、詩人、文藝評論家）總計七十八名のうち、交通その他の關係で缺席を餘儀なくされた若干の人たちを除く多數の出席者を得て、折柄の雷雨を伴奏に午後三時半開會。岸本參事官より設立會議開催までの經過報告があり、弘報處長の挨拶の後、弘報處長を議長に推して議事は進められ、準備委員の間に練られた滿洲文藝家協會設立要綱を檢討、愼重審議をつくして滿場一致これを會規として承認、窓外の雷雨に和する嵐の如き拍手裡に我滿洲文藝家協會の成立が宣せられたのである。

この頃の、小生の日記から書き拔いて見る——

一　月

木村の「本」を譯す。

梅崎の『第二代』受贈。

椿堤の「蒼蒼」を譯す。

滿新へ「中國作家案內」を書く。

石軍「牽牛花」譯着手。

秋螢の「礦坑」譯着手。

『日滿露在滿作家選集』到着。

二　月

哈日の報告文學應募作品を選衡。

秋螢の「新開風景」を譯す。

端木蕻良「科爾沁旗草原」譯着手。

「血刃圖」譯す。

「紅葉」譯す、『滿洲』へ。

『學藝』出版。

長谷川時雨『虎』出版記念會。

三　月

吳鄕「豆腐生涯」飜譯。

「滿洲出版界への一提言」を『收書月報』へ。

電話二一三三八二番　新京一一〇

「群星亂墜」譯。
小松の『北歸』受贈。
岡田益吉君離京。
文話會臨時總會。

四　月

「回憶中的上海」執筆。
哈日、報告文學發表。
『雜感之感』出版。
「鈴蘭花」譯了。
「鑛銀之像」譯。

五　月

『僻土殘歌』出づ。
未名の「おとなしい男が天國へ行った話」を譯し、滿日へ。
「感銘を覺えた本」大日へ。

六　月

「春光」着手。
文話會役員會。
瀨沼三郎氏死去。
「大陸生活者の反省」『滿洲評論』へ。
獨ソ開戰。
『新文化』へ原稿送る。

七　月

盤石、樺甸、西安等へ旅行す。
ラヂオドラマ放送。
滿日藝文講座へ出講。
文藝家協會準備會。（七、一七）
「事業開拓」譯了。
文藝家協會成る。（七、二七）

電話二一三三八二 振替新京一一〇

文藝家協會委員會（七、二九）

「滿洲文藝家協會の仕事について」を滿新へ。

八　月

文藝家協會座談會。（滿日）

「皮箱」譯す、『日本の風俗へ』。

「白痴知識」譯着手。

文協委二回。

二五日、藝文聯盟成る。

九　月

戰爭と文學について、滿新社會欄

『船廠』出版。

十　月

藝文書房開く。

「滿系文學理論的構築」滿日へ。

『滿洲評論』講演會滿鐵、西廣場厚生會館で、「滿洲文化の諸問題」を講述。

「我々の文學活動と勤勞者精神」滿新へ。小松より「野葡萄」受領。

「文藝家協會は何をなすか」哈日へ。

文藝家協會月例會。

『藝文』準備進む。

十　一　月

「歌謠家の人々」譯了。

「沃土」に着手。

「滿洲文學の二十年」着手。

「城性地帶」譯了。

『小工車』受贈

「新支那の文學論」滿日へ。

十　二　月

八日、對米英開戰。

國語二一三三八二 坂口新文二一〇

文藝家協會委員會（七、二九）

「滿洲文藝家協會の仕事について」を滿新へ。

八　月

文藝家協會座談會。（滿日）

「皮箱」譯す、『日本の風俗へ』。

「白痴知識」譯着手。

文協委二回。

二五日、藝文聯盟成る。

九　月

戰爭と文學について、滿新社會欄

『船殿』出版。

十　月

藝文書房開く。

「滿系文學理論的構築」滿日へ。

『滿洲評論』講演會滿鐵、西廣場厚生會館で、「滿洲文化の諸問題」を講述。

「我々の文學活動と勤勞者精神」滿新へ。小松より「野葡萄」受領。

文藝家協會は何をなすか」協日へ。

文藝家協會月例會。

『藝文』準備進む。

十　一　月

「歌場家の人々」譯了。

「沃土」に着手。

「滿洲文學の二十年」着手。

「城性地帶」譯了。

『小工車』受贈

「新支那の文學論」滿日へ。

十　二　月

八日、對米英開戰。

電話二一三三八二 振替新京二一〇

「淡人の滿洲開拓」『觀光東亞』へ。
「青服の民族」譯着手。
長谷川濬、三河へ―。
アイケルトに會ふ。
『藝文』創刊號出づ。
「戰爭と文學」『藝文』創刊號へ。
「墟園」譯了。
「大東亞建設と藝文」脱稿へ。

以上で、この大東亞戰爭が起るその年のおほよそが回顧出來るのだが、少しく補遺を加へよう。

滿洲文話會は、新しい藝文團體の組織結成を機として、各地に於いての藝文翼賛團體として再出發することに定められた。しかし、實際には、この意圖は所期のやうには進まなかつたやうである。尤も、所によつては、別な形を取つてそれは具體化されて來てゐるとも言へる。

各地での藝文協會といつた團體がそれである。それらは、專門家の組織で文藝家協會とはその質に於いて截然と區別さるべきものを持つてゐる。素人愛好家をも糾合するといふ良さはあるのだが、文藝家協會にはまた今日の時局下に精鋭分子を結集するといふ意圖が存してゐることを忘れてはならない。

文藝家協會は山田清三郎を委員長とし、古丁、奥郎、爵青、大内隆雄、楳本捨三、宮川靖、逸見繁吉、筒井俊一、宮井一郎、穆儒丐、野川隆を委員とし、（野川は後に退いた。）會員は安達義信、奥夫、今村榮治、上野市三郎、植村敏夫、上脇進、牛島春子、袁犀、楳本捨三、大内隆雄、王則、王秋螢、岡本隆三、奥一、神戸悌、外文、北尾陽三、北村謙次郎、北小路功光、疑遲、季漠、弓文子、共鳴、奥瑛、顧彭、古丁、奥郎、爵青、坂井艷司、山丁、小松、晶埜ふみ、辛嘉、辛實、高森文夫、橙一雄、張我權、筒井俊一、杜白雨、仲賢禮、長谷川濬、逸見繁吉、松畑優人、丸山海介、綠川貢、三好弘光、宮川靖、望月百合子、山田清三郎、山崎末治郎、李文湘、劉漠、劉行建、青木實、安尾、小杉茂樹、成弦、譚鐵鋒、佟子松、穆儒丐、富田壽、中山美之、日向伸夫、町原幸二、宮井一郎、三宅豐子、山田健二、楊野、李雅森、靈非、加藤秀造、君頤、支離、平八郎、陳隄、竹内正一、莫伽、塙政盈、沫南、岩本修藏、上野凌嶝、金音、古屋重芳、秋原勝二、苦土、黄河、鈴木啓佐吉、石軍、高木恭造、工清定、棚木一良、陳無、田兵、野川隆、李妹を最初會員とし、關東州在住の廉生練太郎、井上麟二、加納三郎、島崎曙海、城小碓、武田勝利、西村眞一郎、古川賢一郎、古川哲次郎、木風、八

木橋雄次郎、豊島、吉野治夫を會友とした。なほその後、高橋男、尾田幸夫、島田清、林田茂雄、小林貫、大野澤緑郎、八木義德、山口正幹、酒井美津子、横田文子、石河潔、菅忠行、楊葉、希文、里雅を會員に、川島豊敏、福家富士夫、田村昌由、南鷗を會友に加へた。なほ、死亡、國外移居、國内移居等によつて若干の變動を生じてゐる。

前に觸れられてない『學藝』について。これは專ら令歌（李文湘）の努力によつて新京の益智書店から刊行された文化、文藝の刊行物で、二輯出てゐる。爵青の「歐陽家的人們」などもはじめこれに出たのであつた、木崎龍、岡本隆之、大内隆雄などもこれに寄稿した。

滿系作家との往來を書くと、最も古くは今の石軍、當時の文泉を曲傳政の紹介で間接に知つた。また今朝こと勵行建こと馬軍醫も曲の紹介で直接知つた。

何連鐵は八面城から手紙を寄越し、文通を繰り返した。

その他は、新京での交際である。古丁、小松、爵青、外文、疑遲…吳郎、吳瑛、金音…杜白雨辛實、山丁、戈末、楊葉…冷歌…夷夫、…劉漢…安犀、黒風。また奉天から來る秋螢、佟子松、成弦、田兵…。北方にゐる石軍。楊絮。一々書けば、きりがない。若干の連中は、今北京にゐる。柳龍光、百靈、王則、梅娘、辛嘉、共鳴…曲傳政…等々。張政昌も忘れ難い人物である、

康德九年を回顧して、本稿を閉ぢることとしたい。

第二十章　康德九年以後の概況

先づ概說——昭和十六年が滿洲文學界にとつて組織確立の年であつたとすれば、昭和十七年（康德九年）は、この組織確立のあとを受けて、作家が一方には沈潛的に精進創作にいそしむとともに一方には公的なつながりの線に沿つて外面的に且つその間に自己を鍛へ來つた時期であつたと言ふことが出來るであらう。大東亞戰爭の勃發は、この國の滿系知識階層の意識をとみに明朗にしたと言はれてゐる。そのことは文學の部門にも反映されたことを指摘出來る。

一月十八日には、滿洲文藝家協會主催で新京に於いて文藝家愛國大會が開催された。

一月、雜誌『藝文』が創刊された。一般ではもつと文藝方面に力を入れることと期待したやうであつたが、さうも行かなかつたやうである。時局の反映でもあり、營業上の理由もあつたであらう。一

電話二一三三八二振替新京一一〇

方、多年の歴史を有し同人雜誌的境域からよりひろく發展しようとした『作文』が三月に出、十二月つひに終刊號を發行するに至つたのは惜しむべきことであつた。單行本の刊行はかなりに多くなつた。

外的活動としては國家的各種行事への參加、滿洲國新國歌制定への協力、政府及び軍の各種報道隊への參加、華北との作品交驩、大東亞文學者會議への代表派遣等が擧げられる。諸行事への參加とは、協和會臨時全滿への藝文人代表としての古丁氏の出席、興亞動員大會への文學者の參加、建國十周年式典への作家の參加、民族藝文祭に際しての作家の動員等を指す。報道隊への參加は、戰車隊演習への參加、開拓地報道隊への參加、産業報道隊への參加等であつた。これらはそれぞれ報告文學、詩文として結實してゐる。

華北との作品交驩は滿洲文藝家協會と華北作家協會との間に行はれ、滿洲の『新滿洲』、華北の『中國文藝』にそれぞれ次の如く相手方の作品を發表した。

△滿洲側＝爵青「賭博」、小松「老屠夫與其妻」、奥瑛「墟園」、金青「麗娜底悲哀」、疑遲「不歸鳥」、杜白雨「春底流」、勵行建「少男少女」、劉漠「野猪打的喜劇」

△華北側＝張金壽「匡超人」、幻鷗「我的童年」、恭谷慧文「初春散記」、公孫嬰「未諸完的牡丹」、曹菱「哄吶」、麥靜「風沙夜」、程心扮「靴城」、東方儔「養子」

大東亞文學者會議に爵青、古丁、小松、奥瑛、バイコフ、山田清三郎の六氏が出席した。

日本で發行した選集に『滿洲國各民族創作選集』『滿洲短篇小說集』があり、小說單行本に北村謙次郎『春靜』、バイコフ『さわめく密林』、紀行、評論類に山田清三郎「私の開拓地手記」、横山敏男『新京郵信』、報告文學集『地平線を行く』等がある。滿洲で出たものには小林實『開拓祭』、青木實『部落の民』、楳本捨三『阿片戰爭』、高木恭造『奉天城附近』、竹内正一『復活祭』、工清定『迎春花』、北尾陽三『明暗』、大内隆雄『或る時代』、鈴木啓佐吉『愛情の綾念』、爵青『歐陽家的人們』、小松『人和人們』、秋螢『河流的底層』、疑遲『天雲集』、譯詩で『デルスウ・ウザーラ』『春』（藤村）等がある。

新聞に發表された長篇小說には尾田幸夫「曉の滿洲」、山田清三郎「建國列傳」、北尾陽三「白い庭」、山丁「綠色的谷」等がある。

次に注目すべきことは各地に於ける藝文人團體の組織並びに活動が大いに進展したことである。すなはち關東州藝文聯盟に屬する諸團體をはじめ、哈爾濱藝文協會、四平藝文研究會、安東文話會、海拉爾文話會、牡丹江藝文協會、佳都文化協會、吉林文話會等の活動である。なほ各方面の職場での文

電話二一三三八二 振替新京二一〇

藝活動も盛んになつて來てゐることと、滿系の方では青少年訓練の線に沿つて若い文藝人が育ちつゝあることも注目に値ひする。

評論――この部門は、文藝時評、本質論、作家研究等の各方面に亘つて相當に賑かであつた。年頭先づ宮井一郎は『作文』五三輯に「勤勞といふこと文學といふこと」を載せ、前年來噴しかつた勤勞者文學論の締め括りとした。山田清三郎は『藝文』に「滿洲文學界の展望と課題」を書き、日系文藝の躍進を述べた。同誌にはなほ吉野治夫「文化の反省・序」、武本正義「放送藝術の問題」があり、同誌埠刊にはまた大內隆雄「戰爭と文學」があつた。大內隆雄はまた「滿洲文學二十年・第一部」を十ケ月に亘り『藝文』に連載した。

二月の『藝文』には宮井一郎「文學の性格」、古丁「日本文學の攝り方」、杉村勇造「大東亞戰爭と文化共同體」、池邊靑李「戰爭と美術」、柴藤貞一郎「文化と技術と素材」、仲賢禮「高山樗牛と評論活動について」があつた。

滿系の側では『學藝』二輯に吳郎「新文學的進路觀」、李文湘「新詩十年」があつた。ほかに吉野治夫「滿洲藝文聯盟に望む」（滿日）、加納三郎「大東亞戰爭と知識人の任務」（哈日）、上野市三郎「銃後文藝運動の提唱」（同）、山崎末治郎「關滿文化の交流」（滿日）、大內隆雄「最近の小說に現はれた新しい男女の型」（滿日）、山口愼一「滿洲文化の諸問題」（『滿洲評論』）、藤原定「詩論」（『滿洲詩人』）、瀨古確「防人の歌について」（滿日）、大內隆雄「新支那の文學論」（同）、高橋正信「防人の歌」（哈日）、柳生昌勝「大伴坂上郎女とその作品」（『女性滿洲』）、瀧川政次郎「大東亞文化建設論」（滿日）、石原靑龍刀「藝文と川柳の立場」（同）等があつた。『藝文』三月號には酔靑「新興滿洲文學論・建國精神より出發せよ」、靑木實「生活の實態を把握せよ」、森斌「滿洲に於ける農村演劇と演劇工作隊」が發表された。『作文』には宮井一郎「新開學藝欄に就て」、齋藤毅「文明開化について――森鷗外――」があつた。外に『女性滿洲』に竹內正一「在滿女性の道」、大內隆雄「大陸生活者の心構へを」があり、また古川賢一郎「愛國詩所感」（哈日）、山田健二「新時代の兒童文學」（滿日）、宮井一郎「戰爭と文學精神」（滿新）、水上悚介「開拓地の短歌開拓」（哈日）等があつた。

四月は吉川文夫「ソ聯の增產文學」（『藝文』）、林田茂雄「個人主義藝術概史、一」（同）、「林房雄・古丁對談」（同）、鈴木篁二「滿洲文學の批評について」（『滿蒙』）あり、四・五月に上原篤「滿洲演劇運動の動向と檢討」（滿日）、山田清三郎「滿洲文學の行方」（哈日）あり、また在滿作家論數篇、滿洲國と著作權問題についての論稿が出た。

電話二一三三八二 振替新京一一〇

六月には遠田民夫「鼻を探す文學」（『藝文』）、北小路功光「濠洲の文學と風土」（同）、金丸精哉「滿洲の〃季〃について」（同）、七月に桐天吉「現實主義の諸問題」（『藝文』）、大內隆雄「日本の青年文學」（滿新）があつた。

八月には桐天吉「練習と修業」（『藝文』）、橋本八五郎「滿洲文化の據りどころ」（『滿蒙』）、大內隆雄「作家に要求される新條件」（哈日）があり、九月には金原省吾「滿洲文化の單一性」（『藝文』）、上野市三郎「文藝時評」（同）、坂井艷司「〃滿洲詩〃論抄」（同）、青木實「文藝十年の回想」（『新天地』）等があつた。

十月には姜學潛「滿系青少年への文化浸透」（『藝文』）、山田清三郎「史材文學の方法其の他」（同）、大內隆雄「華北文藝界の近況」（滿新）、大內隆雄「全聯と藝文」（哈日）、秋螢「滿洲文藝詩話」（『觀光東亞』）、陳因「滿洲文壇月評第一章」（『新滿洲』）等がある。

十一月には横山敏男「民族的個性の創造」（『藝文』）が出た。

十二月には林田茂雄「民族の藝術」（『藝文』）、富田壽「滿洲文學概觀」（同）、秋原勝二「滿洲の文藝批評」（『作文』）、宮井一郎「文化の獅子座」（同）、山田清三郎「文學者大會に參加して」（『滿洲藝文通信』）、上原篤「國民演劇の構想と企劃」（同）、大內隆雄「文壇回顧」（同）があつた。

以上のほか加納三郎『滿洲文化のために』が年頭に單行本として出てゐる。加納氏がその後日本へ轉じたのが惜しまれる。

小說——主なる作品について見よう。北村謙次郎「東北」（『藝文』一月）は日本東北の旅を描いて水際立つた短篇であつた。長谷川濬「星雲・序章」（同上）は建國當初の青年群を扱つた野心作の序篇。山丁「城性地帶」（同上）は舊き滿洲を鋭く抉剔したもの。日向伸夫「冬夜譚」（同上）は病的な在滿日系を扱つて才能を示した。高木恭造「晩年」（『作文』一月）も在滿日系の型の一つの型を描き出した。秋原勝二「河や山」（同上）も同じことが言へる。上野凌峯「嫩江祭」（同上）は民族協和の實相を生彩ある筆で描き出した。中山美之「征旅」（同上）は味は深い出征記。鶴田和平「繭」（『斷層』一月）は異色あるものだつたが、應これで完つた。爵青「青服的民族」（『新滿洲』連載）は古い有產階級一家の醜事を背景に人物心理の動きを精細に追究した長篇、だが年內に完結に至らなかつた。山丁「芽月」（同上）は北滿の農村を背景に若い男女を彫塑した。吳瑛「處女」（『學藝』二輯）は都會の女を描いたもの、劉渶「大青」（同上）は少年の見た農村風景を描いたもの。小松の「野葡萄」（同上）は貧しい農村の男女の生活圖。疑遲「雪嶺之祭」（同上）は北滿の山

電話二一三三八二振替新京二一〇

に住む男女を扱つて異色があつた。筒井俊一「主從」（『新天地』一月）は巧みに老人の世界を描いた。

北原陽二「野狐」（『藝文』二月）はこの作者らしい虚構の面白さを充分に味せた。坂井艷司「旅にしあれば」（同上）は抒情で訴へるとともに滿洲育ちの若い日系がはじめて日本を訪れた記銀として注目された。吳瑛「墟園」（同上）はいかにもこの國らしい奮い體制の姿を再現した。高木恭造「任地」（『滿洲觀光』二月）はまとまりのいゝ好短篇。『新滿洲』二月の斬丁「鈎漁槍」、冷萍「夜梟」、夫瑛「暗」の三人の新人の短篇、何れも暗いものであつた。

宮井一郎「都邑物語」（『作文』三月）は滿洲都市建設の相を微細に描かうとする野心作の第一部。藤川透「凍死」（同上）は變質的な人間を扱つて面白いのだが、かなりに非健康であると思へた。境田四郎「ふるさと」（『斷層』三月）、鶴田和平「季節」（同上）はともに日本の話を書いてゐる。

二月末刊行の『滿洲文藝』は山丁「熊」、舒柯「覓」、戈禾「杏花村」、爵青「人鬼通靈錄」、勵行建「地獄唇」梅娘「一個蚌」を載せ、滿系文學の里標となつた。

牛島春子「女」（『藝文』四月）は時局下の女の思惟と體驗を描いたもの、莪然とした筆致にひたむきなものがあつて訴へた。爵青「惡魔」（同上）は作者の進境を示す一作、小學校の教員と彼が遭遇する一浮浪少女を扱つて異彩を放つた。微明「宴爲誰張」（『新滿洲』三、四月）は巧みな諷刺的作品、勵行建「男鬼女鬼」（同四月）は作者得意の都會群像を描いたもの。石軍「蕩動」（同四、五月）は農村の子供を描いた力作であつた。

檀一雄「鹿笛」（『藝文』五月）はこの作者らしい現代のメルヘンと言へよう。しかし言葉は多彩だが、構成の弱さが指摘された。李妹「古城秋」（『新滿洲』五、六、七月）はこの國の古い社會に立ち向つた一作。里雁「節婦」（同五月）は一つの悲話。

戈禾「大凌河」（『藝文』）六月は南滿の農民の苦闘を活寫した一篇。晶埜ふみ「鶯」（同）は滿系劇團公演を觀ての考へを描いて、才能を見せた短篇であつた。古丁「竹林」（『蠻鱗』六月）はこの作者が初めて書いた時代物、竹林七賢の人物を採り來つて現代知識人の感懷を寓意したものと見られた。劉漢も『新滿洲』六月に「林則徐」を書いた。

山田清三郎「老宋」（『藝文』七月）は或る日系男女の清純な戀愛から結婚までのこと、それに配するに滿人女中の愛情を以つてしたこの作者としては珍しい題材を扱つたおほらかな一作であつた。

『藝文』八月には加藤透造「馬」があり、馬疫と闘ふ人々を描き、その材料で讀ませるものがあつ

發行所 電話二一三三八二 振替口座新京二一〇

た。同誌、百瀬宏「燃える町」は戰記だが、文學としての燃燒の足りなさが感ぜられた。

八月には爵青が『麒麟』に「長安城的愛戀」を書いた。知識人陸顒にからまる戀と金との奇話を才筆で描出した異色篇であつた。

ほゝに『北窗』で、木畑卯一「丘の子供たち」が美しい短篇として好評、また『新天地』で池淵鈴江「朝子」が氣のきいた一篇、一女性の信仰生活の變化を描いたものとして好評であつた。

九月には『藝文』神戸悌一「縣城」が出た。匪襲に遭つた磐石縣城を守り通すといふ材料に半島人を配し、力の籠つた一作であつた。『青少年指導者』二十卷所載、天穆「獻」も注目すべき一篇であつた。愛妻を亡くしての追憶記であるが、まことに眞摯、そして健康で、育ちつゝある滿系知識人の姿をこゝに如實に見得た。

『新滿洲』九月號には小松「法文教師和他的情人」が出た。惡い條件の中での貧しい知的女性の苦闘を描いたもの、また吳瑛「六月的姐」はアパートに住む女たちのいろいろな型を活寫したもの、また徐放「群」（同誌九・十、十一月）は小學教員群を描いて調刺的な作品であつた。

九月の『中央公論』は爵青「凍つた園庭に降りて」、牛島春子「禍譯草」を載せた。前者は大東亞戰爭勃發の前夜、哈爾濱郊外に集うた滿系、日系、露人、米國人等を扱ひ、民族の交錯、知的滿系青年の模索を描いたもの。書き足りぬ點もあるが、逞しい構想は日本の評壇でも注目された。後者は建國有後の地方に働いた警察官の苦闘をきつちりと描き出したものであつた。『新潮』は竹内正一「風俗國課街」を載せた。『新天地』九月には蹄川透の「三人の遭難者」がある。南洋の思ひ出といふ形式で表題の物語が語られてゐる。

仁木良介「或る軍醫の手記」（『藝文』十月）は嚴肅といふに止まる。小林實「アパートの親分」（同上）は開拓地に取材したもので、餘裕のある書き方だが、些か戲畫化した手法が難點となつた。古梯「崖」（『新滿洲』十月）、乙卡「安娜的懺悔」（同上）移山「恐怖」（同上）は何れも新人の作『藝文』十一月には蹄川透「河のほとり」、中山美之「路傍の花」を載せた。

十二月は『藝文』に秋原勝二「草葬唱」、冬木羊二「白鼠」があつた。前者は東吉林へ旅した一日系の思惟を描いて關心を呼ぶ內容を有してゐた。『作文』はこの月、終刊號を出し、小說は松原一枝「後姿」、新川透「海へ」、池淵鈴江「バベルの塔」、長谷川潛「野火」、青木實「父の記」を載せた。「父の記」は眞摯な系譜もので注目された。高木恭造「再會」（『滿洲藝文通信』）も同じ種類の短篇。『觀光東亞』には加藤秀造「慰靈花」があつた。『新滿洲』には而已「濁流」があつた。

この月、青木實の小說集『北方の歌』が國民畫報社から發行された。

た。同誌、百瀬宏「燃える町」は戰記だが、文學としての燃燒の足りなさが感ぜられた。

八月には爵青が『麒麟』に「長安城的愛戀」を書いた。知識人陸顒にからまる戀と金との奇話を才筆で描出した異色篇であつた。

ほかに『北窗』で、木畑卯一「丘の子供たち」が美しい短篇として好評、また『新天地』で池淵鈴江「朝子」が氣のきいた一篇、一女性の信仰生活の變化を描いたものとして好評であつた。

九月には『藝文』神戸悌一「縣城」が出た。匪襲に遭つた磐石縣城を守り通すといふ材料に半島人を配し、力の籠つた一作であつた。『青少年指導者』二十卷所載、天穆「獻」も注目すべき一篇であつた。愛妻を亡くしての追憶記であるが、まことに眞摯、そして健康で、育ちつゝある滿系知識人の姿をこゝに如實に見得た。

『新滿洲』九月號には小松「法文教師知他的情人」が出た。悪い條件の中での貧しい知的女性の苦闘を描いたもの、また吳瑛「六月的姐」はアパートに住む女たちのいろいろな型を活寫したもの、また徐放「群」（同誌九、十、十一月）は小學教員群を描いて調刺的な作品であつた。

九月の『中央公論』は爵青「凍つた園庭に降りて」、牛島春子「禍蕁草」を載せた。前者は大東亞戰爭勃發の前夜、哈爾濱郊外に集うた滿系、日系、露人、米國人等を扱ひ、民族の交錯、知的滿系青年の模索を描いたもの。書き足りぬ點もあるが、逞しい構想は日本の評壇でも注目された。後者は建國有後の地方に働いた警察官の苦闘をきつちりと描き出したものであつた。『新潮』は竹内正一「風俗國課街」を載せた。『新天地』九月には廉川透の「三人の遭難者」がある。南洋の思ひ出といふ形式で表題の物語が語られてゐる。

仁木良介「或る軍醫の手記」（『藝文』十月）は嚴肅といふに止まる。小林實「アパートの親分」（同上）は開拓地に取材したもので、餘裕のある書き方だが、些か戲畫化した手法が難點となつた。古梯「崖」（『新滿洲』十月）、乙卡「安娜的懺悔」（同上）移山「恐怖」（同上）は何れも新人の作『藝文』十一月には廉川透「河のほとり」、中山美之「路傍の花」を載せた。

十二月は『藝文』に秋原勝二「草葬唱」、冬木羊二「白鼠」があつた。前者は東吉林へ旅した一日系の思惟を描いて關心を呼ぶ内容を有してゐた。『作文』はこの月、終刊號を出し、小說は松原一枝「後姿」、新川透「海へ」、池淵鈴江「バベルの塔」、長谷川潛「野火」、青木實「父の記」を載せた。「父の記」は眞摯な系譜ものでは注目された。高木恭造「再會」（『滿洲藝文通信』）も同じ種類の短篇。『觀光東亞』には加藤秀造「慰靈花」があつた。『新滿洲』には而已「濁流」があつた。

この月、青木實の小說集『北方の歌』が國民畫報社から發行された。

會社 [redacted]
電話二一三三八二振替口座東京一一〇

なほ二つの選集の內容を摘記して置く。

△『滿洲國各民族創作選集』1

木崎龍「ある少年の記錄」、富田壽一「幾山河」、横田文子「美しき挽歌」、長谷川潛「烏爾順河」、山丁「狹街」、疑遲「塞上行」、吉野治夫「手記」、石軍「黃昏の江潮」、ユーリスキー「斷崖」、野川隆「屯子へ行く人々」、秋原勝二「膚」、高木恭造「風塵」、吳瑛「望鄕」、日向伸夫「窓口」、晶基ふみ「綠の歌」鈴木啓佐吉「土龍」、牛島春子「雪空」、ネスメエロフ「雪の上の血痕」、三宅豐子「亂菊」、筒井俊一「林檎園」

△『滿洲短篇小說集』

筒井俊一「姉妹の宿」、野川隆「狗寶」、田邊澄天「美はしき季節」（放送劇）、北原陽三「虛宿」、北村謙次郎「鶴」、楳本捨三「夫は妻を叱るべからず」（戲曲）、大內隆雄「滿系文學の展望」（評論）

なほ長篇の單行本、楳本捨三『阿片戰爭』は百年前の廣東を背景に、英國の對支侵略史を扶別した、著者のかねて唱へる史材文學の第二作。巨きな構成の中に各種各樣の人物を活寫した手腕を見るべきである。佐藤觀次郎『黃塵風』は中支戰線に自動車部隊の計理士官として出征戰鬪した主人公を中心に書いた戰記文學である。

戲曲――劇作家が少いためにこの年もあまり多くの作品は出なかつた。それでも、次のやうな作品が發表され、その或るものは放送された。すなはち日系の側では、中村秀男の「鶴越分隊」（これは東北滿へ軍報道隊員として出動しての所產として注目された。）、楳本捨三「タルチュフ役者」（以上『藝文』三月、加藤秀造「雁は北へ飛ぶ」（『北窗』）、五十嵐重熙「晩秋」（『斷層』十八輯）、江藤京一郎「つどひ」（放送劇、同上）、五十嵐重熙「希望莊の人々」（同、十九輯）等があり、滿系側では李喬「夜航」（『滿洲文藝』）、綽綽「魔手」（放送劇、『滿蒙』四月）、辛實「深谷狼聲」（『影・劇』）、呂諾「人心」（『電影畫報』八・九月）、安犀「清明節」（『同、十月）等があつた。滿系の戲曲創作が漸次盛んになつて來てゐることは注目されることであつた。以上のうち「人心」が喜劇である外は、滿洲の現實を衝いたものが多いのも記憶さるべきである。なほ公演されたものに藤川研一「林則徐」があり、思想を持つ史材劇として注目された。

詩――詩人を綜合して出來た『滿洲詩人』は主として日系の作品を載せてゐる。そのほか新聞、雜誌に隨時作品が出るとは言ふまでもない。滿系の側では專ら新聞紙上に作品を發表し來つてゐる。この年詩集の刊行されたものには、大連在住二十一氏による『撃滅詩集』、島崎曙海の『十億一體』

會社 電話二一三三八二振替新京一一〇

中がある。また滿洲文藝家協會では建國十周年慶祝のための詞華集を刊行することとなつてゐる。ほかに間島方面の半島詩人の『詩現實』が出てゐる由、近時振はぬやうである。

短歌――この日系特有の文學形式はなかなか盛んである。歌誌は曾つて『合萌』『滿洲短歌』『アカシヤ』が合流して『短歌精神』となり、一方北滿からは引續き『滿洲歌人』が刊行されてゐる。

俳句――俳句は關東州に『鵙』、奉天に『山楂子』（『白楊』を合併）、哈爾濱に『韃靼』等の句誌があり、また新京に『柳絮』叢書があつて、活況を示してゐる。

川柳――新京から『東亞川柳』、大連から『川柳大陸』が出て居り、滿日、『觀光東亞』等が柳壇を有してゐる。

隨筆――隨筆、隨想、雜文等を書く人々は日系、滿系ともに多い。隨筆その他を集めた本に『蘭花香る國』一冊がある。

兒童文學――兒童文學では山田健二『國境お友達』矢澤邦彥『杏の花びら』が單行本として出た。楳本拾三は少年讀物として「大日本戰爭史」を執筆した。

その他――前年末、文話會賞の作品賞が北村謙次郎「或る環境」及び爵青「麥」に、功勞賞が『作文』に與へられた。滿洲詩人會では詩作多年の古川賢一郎に第一回滿洲詩人賞を授賞した。

五月二十九日には、哈爾濱でバイコフの文學生活四十年を祝ふ記念の夕べが開催された。こゝで、滿系側の同願を吳郎氏の一文に據らう。

康德九年は滿洲建國の十周年であり、滿洲藝文の指導中核と稱される「藝文指導要綱」が公布されて後の第二年、滿洲文藝家協會が結成されてからの第二年であつた。すでに激動する社會に於いて結實し、實踐の中に生長し來つた滿洲文藝界は、茲に於いて、一新された狀態の中に、既知と未知の藝文家を綜合し、その總力をもつて一つの新しい藝文時代の到來を作り出すこととなつた。

勿論、このやうな新しい傾向の氣分に圍繞され、この積極的に來つた氣息は染感して、作者は一時倘惚と不安の中に隔てられ、反つて停滯の狀態に置かれた、これは決して偶然な事ではないと信ずる。然らば、我々は過去一年間の作品と評論を見、一般に批評して沈滯、低調、活動を缺くと言つてゐるのに對し、他の原因を思索する要はないのである。

康德九年の滿洲文藝界を綜觀するに、その活動力はまことに數年前の旺盛だつたのに及ばない、特に人を注目させる傑作もなく、論を立つること新鮮な評論にも乏しかつた、全般的な活動を見れば誠に沈滯低調の感があつた、だが前に述べた理由を見れば、奇異となす所もない。

しかし、反面から見、數字の比率を、過去と較べば、特に減少してもゐない。滿洲文壇に關心を持

會社 電話二一三三八二振替口座新京一一〇

つ一日系作家富田壽氏の統計に據れば、滿系で尙六十三篇の多きを有つた（評文を內に含む）、然らば、富田氏の遺漏で數に入つてゐないものもあらう、何としても、百篇以上の成績であつたらう。

現在、滿洲に在る發表機關で、文學に關係あるものは、凡そ雜誌で三種（『新滿洲』『興亞』『國民畫報』）、新聞で二種（大同、盛京）があるが、以前の發表機關に比べると、今は非、昔は可だつたといふ感が確かにある。因つて、昨年一年間の文學活動を探討するに、その盛んでなかつた表現は、內在的な作家たちが新しい傾向のために惶惑不安となつたことの外に、その外在的原因は、次の通りであらう。

1 諸雜誌に於ける新文藝欄の量が減少した、間に二三種廢刊されたものもあつた。
2 新聞紙の文藝欄の活動の沈滯とその減縮、中には文藝欄を廢した新聞もあつた。
3 滿洲文藝家協會の活動力に不足の感があつた。
4 滿洲では專開の文藝雜誌を缺いてゐる、ために創作力に旺盛な指導力を缺乏せしめるに至つてゐる。

右の如くであるが、我々はなほこの過去一年間の滿洲文藝界の概觀的情形を指出する要がある。

先づ、單行本小說集について。その出版された作品集は、八年の數量を超えてゐる、凡そ次の通りである。

1 秋螢の第一、長篇小說『河流的底層』（實業版）
2 爵青の第一、短篇小說『歐陽家的人們』（九年盛京時報文學賞入賞作品、藝文版）
3 小松の第二、短篇小說『人和人們』（藝文版）
4 疑遲の第三、短篇小說『天雲集』（藝文版）
5 吳瑛主編の短篇小說集『滿洲文藝』（滿圖版）

これに據れば、滿洲の作家たちが不斷に滿洲文藝の航程を跋涉したことを窺知し得る。次にこの五つの單行本について簡單に紹介しよう。

康德七年來、滿洲の多くの文學者は長篇小說を書き出した、先づ古丁の「平沙」、小松の「洪流的陰影」の百枚が開端となり、その後、王則、金音の二百枚乃至三百枚が出、終に秋螢の八萬字の「河流的底層」が出現した。

この八萬字の長篇は、過去の若い學生を描いたもので、場所は縣から省城へ來、その後又北平の青年の墮落生活に轉ずる、我々現代の青年の一つの巨きな影であり、それは實際に當時の社會の若

干の眞實な人物の面影を留めてゐる。この小說では、學生の外に、官場に於ける廳長、新廳長に取り結んで科長にならうとする男、ともに爲政者の面目を表現してゐる、登場人物の家庭、子女もみな實に卽してゐる。

物語の構成は、全體がよく整つてゐる結末の部分は急いでゐるが、なほ描寫すべき事物に照應してゐる。そして主なる人物にそれぞれの當然な路を進ませてゐる、張大嬌が再びその夫を愛すること、林夢吉が終に歸つて來ること、質文が高壯な中學生となること、小香が一工人に嫁ぐこと、周漢英は特に哀頽腐朽した野草の中に一本の拔きん出た高草として描かれてゐて、なほ一つの希望があるやうで、一陣の暴雨の後、我々が虹の出現を望み得る如きである。

作者は執筆完成後に、自ら「精神的に顰せずして顰し、啞とならずして啞たり、同時に愛しつゝ愛し得ず、憎んで又憎み得ず、すなはちこのやうな苦しい氣持の中から押し出されて來た……」と述べてゐる。作者はこのやうに自餒してゐるが、しかし我々は「河流的底層」はつひに「底層」的作品であることを信ずべく、同時に我々は更に作者がその艱苦の文學生活を放棄し得ぬことを信ずるのである。

次に作品集『歐陽家的人們』について語らねばならぬ。これは爵青の第一の作品集であり、また九年度の盛京文藝賞を獲得した作品である、本集には十二の短篇が包含されてゐる。中には爵青の「屢々少年時代の官能と感覺を見出し、更に私の快樂の、悪魔的少年時代……」を記念するための最初期の作品も若干收められてゐる。

斯くして、我々は爵青の初期から現在に至る創作の全貌を見得る爵青は、滿洲で稀れに見る精力の旺盛な作家である、その作品は實にジイド、プローベルの脈絡に淵源してゐる、そしてそれを彼自身の思路の中に融溶してゐる、このため同一の知性の作者と稱され、甚しきは「鬼才」とさへ稱せられた。

作者は創作態度について、周邊の平庸な現實を描寫するのに反對し、創作の中に作者の哲學を有すべきことを主張した、これは作者が哲學的思惟患者となつたのである。『歐陽家的人們』集中にこのやうな香ひが濃く存してゐる。

集中の物語の題材について言ふと、半ば以上は一種の超現實的な奇蹟である。その中で「男女們的塑像」「斯賓拉寒先生」「青春胃潰××」等々は、すなはち甚だ好い例である。作者は主觀的觀念で書き、彼自身の哲學を發揮してゐる。主觀の世界に於いて、多くの奇蹟的な故事を幻想し出してゐる。爵青初期の作品に、我々はその一般を窺知し得る。

會社 電話二三八二振替新京一一〇

この集の後半部に收められた作品「潰走」「大觀園」「歐陽家的人們」は、眞に「心上文學」が最高潮に運用されたものである。「潰走」は理智と理智の衝突、矛盾、不安を描き、終に××の悲劇に至つてゐる、「大觀園」は大都市の潰瘍のやうな一隅に發生した悲劇で、それには倫理に迷つた父子の感激の涙、若い淫賣婦の愛の施しの涙の痕があり、短篇小說の能事も振め盡してゐる、技巧、構成ともに完璧の作と言へよう。中篇「歐陽家的人們」は、陽歐家の六人の兄弟及び一人の娘の、社會的及び人間的な葛藤衰微の物語を主體として、大きな時代の新しきものと舊きものとの衝突を描いてゐる、歐陽解は脫出して大時代の人間として殘り得なかつたが、歐陽守箴はこの潰倒した廢墟を逃げ出したのであつた。

この書は、作者は「このやうに紙には印しても、讀者の心中には印し得ぬかも知れぬ……」と言つてゐるが、我々は確かにこれは一人の才華橫溢せる精力的な作者の第一部作品たることを感じ得る。

第三に、小松の第二部短篇作品『人與人們』。

『人與人們』は四年前の『蝙蝠』とはすでに遙かに異つた作風を形成してゐる。この作品集に存する共通點は、これに含まれてゐる十二篇の小說中の人物の、殆んどすべてが病態的な非健康な姿であることである。墮落した小市民知識階級分子、病態戀愛の青年男女、利己的な無知無識者、一生を苦しみそれをいかなることとも知らぬ部落民、これらのやうな現實に對して責任を有たぬ無知無識者だ、作者も曾つて「同時に彼等に少しの希望をも與へなかつた」と闡明した。

これまで小松の作品に充滿してゐた藝術美感と色香の感覺は、『人和人們』の一書では、幾らか變つたとの印象を與へる。それは彼が現實を描寫することを企圖し始めたのである。だがこの現實の描寫は、往々その優美な辭句のために物語の實感を蔽ふてゐる。そのため浮動、輕彫の感がある。これは假背の作品に於いて、絕えず絮々喋々と不要な事柄を談じてゐるのと同じやうに注意すべき點であらう。

「人絲」「鈴蘭花」「赤字會計」「部落民」「施思」等は、一般讀書界の好評を博した創作である。殊に「人絲」「部落民」の取材上の新鮮さは、當時話題となつた。「赤字會計」の、辨當箱から戀愛に入つてゐる描寫は、滿洲新文學の必然的な傾向を象徵してゐる等々、ともに作者の聰明な描寫の佳さであつた。『人與人們』を『蝙蝠』と比較すると、題材に於いても描寫に於いても、顯らかに以前より領域を擴大した、若し作者が更に一歩を進めて物語の眞實さに力を致すならば、かて最も完璧せる小說家となるであらう。

昭和 國民新聞社
電話二一三三八八 振替新京一一〇

第四に、疑遲氏の第三部の短篇集『天雲集』について述べる。

疑遲は『花月集』『風雪集』等一連の作品の後に、昨年またその第三部短篇集『天雲集』を世に問ふた。この三部の短篇を讀むと、一つの共通した感じを有つ、それは作者が滿洲の自然の風物を、處理するに慣れて居り、その文は質樸無華、冷靜で透徹した滿洲の自然風物の觀察者となつてゐることである、これは疑遲氏についての定評である。

『天雲集』には八つの短篇が入つてゐる、「酒家與鄉愁」「不歸鳥」「雪嶺之祭」が本集の主力作となつてゐる、「酒家與鄉愁」は蒙古平原に近い寂しい場所の酒家の風味を、「情感」的筆法で完全にぴつたりと描いてゐる、許正と張老人の旅愁と鄉愁が、紙面に活寫され、胸檻を跳り出て跳躍する心地がする。

「雪嶺之祭」は密林生活に奮鬪する狩獵者を主題として始められた緊張人を動かす物語で、物語中の人物は、作者が過去に描いた典型と餘り大差無く、性格は依然として甚だ粗野であるが、洋溢する生命力を有つて居り、或る人間にひどく踏みつけられる、忍受の限りを盡すが、しかし時には粗暴な野性を發揮する。

作品では自づと周慶が主人公である、だが周慶の身邊を圍繞する人物、綠林より退身した于老頭、その子于亮、友人の張富、佟老四の如き、みな崇高な眞性を有つ鍛のやうな男である。しかしこれらの血氣あり、義勇ある錄汗子が、車福臣のやうな人物に向つては、あつさりとやしつけられその長を施し得ない、ここに作者が最も關心を有つ事態が顯らかに示されてゐる。

この小說では人物の處理について、多くの義氣血性漢の中に、車福臣のやうなこんな人物を置き、彼等の運命の主宰者として、彼等の生存の運命を布置してゐる。佟老四の妻が代りにかどはされ姦されようとする、周慶の女房が車福臣とくつつく如き、一面愛すべき筆法で周慶の妻の運命を描き、更に憎むべき筆法で車福臣の剝削と欺騙の手段を寫してゐる。

このやうな題材は、若し作者が生活の豐富さと觀察の精密さを持たなかつたら、決してこのやうに力強くは書かれ得なかつたであらう、ここに作者の創作への忠實さが見られる、我々はだがこのやうな作品が滿洲の文壇に於いて——疑遲氏以上にも見られることを願ふのである。

最後に、吳瑛主編の『滿洲文藝』について書く。

これは同人雜誌湖零の時代に出現した有力な創作集であつた。全滿の精力的な文學青年の原稿を集めたこの刊行物は康德九年度の文壇に一異彩を放つたものであつた。それ故、吳瑛は編後記に特に言つてゐる。「私は毎晩澤山の原稿を讀んだ時、私自身が文中の情緒に引き入れられて行つただ

發行所　會社　國民書房
電話二一三三八二振替新京一一〇

けでなく、私は又これらの文章の中から、一層深く作者たちの精神を覗ひ視た、この精神は端無くも私に一種名づけやうのない力を示してくれた、この力は暗かに私を推し動かした……」。

これらの言葉はまさに編者が滿洲新文學の力を說明したものである。我々は『滿洲文藝』を讀んで、表紙に題した「滿洲新文藝最高峰的代表作」が絕對に正しいとは承認しないものの、その內容に對しては驚喜に値ひするものがある。これらの作品は、作者の體質と精神が絕對に硬化してゐないことを表示してゐる。絕對に弱り衰へたのでない作品の出現は、やはり比較的冷寂だつた昨年度の滿洲文壇を點綴するに足りるものであつた。

それには、讀むに値むする作品が極めて多かつた、山丁の「熊」、舒柯の「覓」、戈禾の「杏花村」、勵行建の「地獄層」等の四篇の小說と、李喬の一幕物「夜航」は何れも廣大な滿洲を背景とし力強い手法で「人渣」の動きを描いたものである。「杏花村」の村長と鄉紳の鬪爭は、鬪爭に犧牲にされた無知無識な人々の群れを反映してゐる、また「地獄層」では地獄に生活する魔鬼、太陽の光線のない生活者を描き、民族の頹廢と悽愴を描いたもので、洵に力作である。更に「覓」「熊」及び人を動かす一幕物「夜航」の如き、ともに作家が心血を濾いだ力作である。

爵青の「人鬼通靈錄」は、遠く眞實を離れた警句を用ひ、智慧者の說敎を濫用する所から更に一歩を進めて哲理小說の創作の例を開いたもので、これは爵青の企圖試作だつたと言へる。梅娘の三部曲中の「蚌」も全部がこれに發表された多くの女たちの蚌のやうな生活を主題とした物語で、相當にこれも人を感動せしめるものであつた。

外に、なほ金音、也麗の散文、それから未名の童話があつた。

次に、我々は雜誌に發表された作品を見よう。それは前述した單行本とは違ひ、新作品が發表されたものである。單行本は大抵過去の雜誌或ひは同人誌に發表された文藝である。

作品活動から見れば文壇の新人の活動はすでに知名者の績果に劣らぬものを示してゐる。我々は『新滿洲』の春秋二季の新人展に於ける作品を每號の知名の士のそれと比べ、新人の努力を見出すのである。

その中で我々の記憶に殘つてゐるのは、次の數人の作品である。

冷萍の「夜梟」、夫琪の「暗」（『新滿洲』春季新人展の中）

乙卡の『安娜的懺悔」、古梯の「醫」（『新滿洲』秋季新人展の中）

王朗の「花」、蘇捷の「腸斷之書」、左蕾の「柳琦」（以上は『麒麟』に發表されたもの）、

この七篇の滿人の作品は、ともに稀れに見る成熟した題材であつた。殊に前の四篇は、作品の思

會社 電話二一三三八二振替新京一一〇

路と意識的展開を把握し、人を驚異せしむるものがあつた。

冷萍の「夜梟」の描寫は、ドストエフスキーの「罪と罰」に於ける主人公の罪を犯した後の心理の變態によく似てゐた、「夜梟」は同じやうな筆致で青年和尚の良心の自責を描き、それに同情、憐憫、及び警曉を混へ、期待すべき作品となつてゐた。だが作者が文中に宗教的信心を牽き入れたために、全篇の作品構成に甚だ大きな影響を與へた、若し全篇を天罰鬼神を畏れざる、心理の變化の發展を以つてこの物語を作り上げたら、その成功は更に大であつたらう。

夫琪は文壇で後から起つた努力家である、「暗」に於いて作者が題材の把握にいかに苦心をしてゐるかが判る、作者は初期の寫作の姿態を棄て、眞つ直ぐに暗い方面を追求した、しかも充分に愼重に處理した、この點で記憶に値ひした。だが處理能力を缺いたために、依然として素材小說の姿態を以つて出現した、それはちようど現段階の滿洲文學界が犯してゐる同じ弊害である、最後に梅姑娘の死をあのやうに粗劣に表現し、纖細な心理の變化を缺き、任意に小說中の人物の生死を處置してゐる、それは甚だよくない態度である。

冷萍の「夜梟」に繼いで好評を獲たのは乙未の「安娜的懺悔」であつた。これは良知色能を純眞な素材と溶合させた作品であつた。彼女（作者）は小說の主人公を、最も細かな心理で描寫し、讀者をして知らぬ間に同情、默案に陷れる、その間に作者の寫作の力を表示してゐる。我々は禮教と純眞とがいかに仇隙を發生するかを眞に知らない、この作はこの仇隙を具體的に指示し出してゐる。「安娜的懺悔」も、人間の必然的運命を象徵したものである、作者はまさに年富力強な鋭い社會觀察家である、この希望ある文學の才に背かぬことを願はう。

古梯の「窖」も又自づと現段階の滿洲文學の素材小說の通病を犯してゐる。しかし古梯は確かに物語叙述の能手である。そのため結構と描寫との双方に於いて、顯らかに夫琪の「暗」に勝つてゐる、殊に「窖」は或る地方の生活の血口を表現し、その血口は勤勞者の金銀を吞食するのみならず、血と肉を吞食する、あらゆる地獄層の悲劇がそれの原因の上に展開されてゐる、我々は指責の手段でそれを除くべきである、古梯はこのやうな寫作の情緒下に、この一篇の創作の使命を完成させてゐる。

この四篇に反對なのは、愛情を重點とした新人の創である。これは『麒麟』の昨年新文學に於ける稀れに見る貢獻であつた。

王朗の「花」と蘇捷の「斷腸之書」の二作では、その愛情の生發の描寫はみな所謂純情に發源した單一であらうと雙方的であらうとに論無く、みな距離に趨らぬ、奇特な非理に走らぬ相愛を文章中

會社 電話二一三三八二振替新京一一〇

に發揮してゐる。それで、人をして特別に同感を持たせる。譬へば「花」に於ける療病者工人の片戀と、「斷腸之書」で産婦が肺結核のために愛情を抑制される深刻な愛の顯揚、何れも愛情物語を高雅化し、純情化してゐる、殊に王朗の「花」は沈着な筆を以つて、この高雅な片面的愛情物語を叙述して居り、洵に一篇の高級な「愛情讀物」であつた。

左蒂の「枳珊」は、物語は一人文學少女の愛情の苦悶を叙述したものである。彼女は單純な書物の上での遐思でなく、生活を處理すべく、環境と生活の二重の壓迫下の憂鬱に周旋する、筆法は相當に洗鍊されてゐた。我々はこの作品の作者に對して、今後の文學の歴程上の行進を凝視するものである！

その次に、すでに名を成した作者の活動狀態を叙べよう。旺盛ではなかつたが、その中には千秋の努力を拂つたものあつた。

知名な作者の作品發表の支持には、『新滿洲』が最大の努力を拂つたと言へよう。譬へば「新春文藝」「建國十年募集小說」「滿洲童話特輯」及び毎月の文藝等は、均しく一流の作家を動員した精鋭の力作であつた。記憶に値ひするものに、左の名篇があつた。

鈍風「我不再臉紅了」、信風「鄉居散記」、沐南「兩船家」、勵行建「男鬼女鬼」、石軍「勵邊」。里雁「節婦」、方之夷「安娜與蘇珊」、劉漢「林則徐」、爵青「惡魔」、小松「法文教師和他的情人」、吳瑛「六月的蛆」

鈍風の「我不再臉紅了」は、心理描寫をもつて、或る人間が惡事をなし顏を赤らめる所からもう顏を赤めなくなるまでの過程を優れた筆づかひで叙述してゐる。「鄉居散記」には、農村教育の實態が見られ、眞實の報告文學として讀まれて差支へないものであつた。勵行建の「男鬼女鬼」は恰も一篇の立派な禁煙讀物であつた。彼は小說の處理に、阿片の害毒を以つて間接の主題とした人を動かす物語をつくり出してゐる、そのため相當な成功を獲得してゐる。石軍の「勵邊」は所謂「下江」一帶の人と事を主題とし。一僞善者たる鄉紳の活動を描寫し、吳興一家の興衰を以つて北滿洲の農村と人物を紹介してゐる。企圖は敬佩に値ひするものであつた。だが着筆が過度に亂れて居り、竟に物語の連續性を失つてゐる。それに多量の土語を用ひ、昨年度土語文學の代表作となつてゐる。里雁の「節婦」は不幸な人間が遭遇した厄運を、全幅の筆力を以つて描寫し、そして一つの問題の啓示を成してゐる。「安娜與蘇珊」は二人の違つた女を描いた、だがその運命は同じく、彼女等は茫々たる人海の中で、生きるために鬪ふ、かなり力強く描かれてゐる。吳瑛の「六月的蛆」はやはり滿洲の女らの性格を描いたもの、ここには殆んど無知、活ける軀殼を有し靈魂を有せぬ人

發行所　會社　國民畫報社
電話二一三三八二番　新京一一〇

々が苟責の筆法で、「蚯」としての命運を斷定されてゐた。

歴史小說は、去年話題となつた四作があつた。

古丁の「竹林」、骨青の「長安城之憂鬱」（以上『麒麟』所載）及び劉漢の「林則徐」、未名の「易妻記」（前者は『新滿洲』、後者は『愛路』）

歴史小說は今日、作家の一つの創作の路となつてゐる、（今後は旺盛な火花と燃え出すかも知れぬ）、現在に於いても輕視は出來ない、尤もただ過去の感情を復活させて個人の情感を表現するだけでは、實は歴史小說の眞髓となすに足りない、我々は歴史小說に對して、まさに過去より探し出し、現實と相同じい主題を積極的に發揮させてこそはじめて正しいのである。だが昨年のこの四篇は、それほどのものではなかつた。

「林則徐」は一個の頑固な英雄の前奏曲と見るべきもので、あの偉大な「鴉片戰爭」の描寫としては確かに不足の感があつた。だが、「林則徐」の取材は、確かに作者が大いに苦心したものである。「その成功が卽ちその失敗」といふ所には、なほ幾多の議論があらう、ただ一方的な勝利を描いた描き方は、全體の事實を誤解させよう。古丁の「竹林」は、逸隱の鬱憤の情が油然として紙上に躍り、近來稀に見る歴史小說を成してゐる。だがただ個人と自我の情感を強調し、鬱々と瘋狂、

酒杯の人生に狂逸傲世した物語を描くことは、三思すべきであらう。「長安城的憂鬱」「易妻記」はそれ以上に現在求められてゐる歴史の題材を滿足せしめるに足りぬものであつた。

この外、雜誌に出た文學評論は、顯著により低調であつた。もとより評論家の不振が關係してゐるが、雜誌がこのやうな文章を謝絶したことも、やはり同じ損失であつた。記憶にあるものに『新滿洲』に陳因の「滿洲文壇月評」があつた、が毎號は出ず、『麒麟』には林日雨及び夷夫兩氏の『麒麟』創刊以來の全面的批判があつた。

次に說明せねばならぬのは新聞紙の文學である。

新聞紙の文學については先づ一つの界境を定め、最初に新聞に出た長篇或ひは中篇の小說を紹介し、次に新聞紙の副刊について書く。

長篇小說には大同報が去年の五月から連載した山丁の「綠色的谷」と、奉東日報上の疑遲の「松花江畔」があつた。一つは二千萬字に近く、一つは八萬字以上の新聞小說である。

詳細な理論と批判は、二氏が單行本に付した際に更に述べることとし、こゝにはただこの兩長篇小說の概要を指摘しよう。「綠色的谷」は山丁が熟知してゐる「狼溝」といふ地方に起つた出村の物語を主題とし、滿洲の廣漠たる農園山村を背景とし、その中に動く小さな人物のいきいきとした

發行所 會社 國民書房

形態を描寫し、草萊時代の大自然及び封建的搾取の中に生を求める蠢動が、紙面に躍つてゐる。最後に農村の開發、鐵道敷設から前後、隔世せる如く、この山村をして又一條の徑を進ましめた……

この小說は、去年五月に始まり、十月に至つて終つた、同時に該小說は大內氏により日文に譯され、哈爾濱に連載された。

疑遲氏の第一部長篇「松花江畔」は、やはり氏の一貫した作品の性格を有してゐる。この小說は作者の物語を更に延長せしめたものであつた。それは茫茫千里の滿洲の母河松花江を背景とし、生動する物語を展開してゐる、殊に新聞小說的性格を加へたために、筆力が強まり、各章節が愛すべき文學となつてゐる。

次に、盛京時報は前年の計畫に引き續き、左記諸氏の中篇小說を載せた。一月から七月まで連載されたものは——

1　吳瑛の中篇「儘花」　2　爵青の中篇「月蝕」　3　吳郎の中篇「參商的青群」　4　野鶴の中篇「盲」

吳瑛の「儘花」は更に一歩を進めた心理描寫の作品であつた、彼女は一人の現代女性の夢想を完全に描き出した、過去は屑しとせず陳腐とし、未來に遠大な理念を持つ、實力がないために、翼を失つた鳥雀の人々の中での亂鬪を效のふのみ、一種の動機に似た儘花と成つて人々の中に存在し、追求し、追求する、だが何を追求すると言ふのか?、本篇はこのやうな女性を、仔細に描き、新型の作品と成つてゐる。

爵青の「月蝕」は未完成の作品である、このいかなる作者とも性格の違つた作者は、「月蝕」に於いてもその奇蹟的な作風を保持してゐる、それは一人の蕩兒が異地での放蕩に厭き故郷の伯父の家に歸つて來る、其處で久しく別れてゐた姉妹や血緣者と會ふ、だが一時の約束は放蕩の情に勝たず、そこで又家郷で數年前の不良少年の舊夢を再演し出すことを述べたものである。物語は此處で止まつて、未完成の作品となつてゐる。これからも、作者が依然として主觀的博學を發揮し、他人と違つた用語を誇示してゐるのが知られる。

參商的青群」は吳郎の一種の試作的企圖によるもので警教小說と認めるのは滿洲ではまだ早いが、しかし彼は結局このやうな記錄に堪へる夢を作つたのだつた。彼は一塊の土の上に生活してゐる二つの異つた民族の活動、この活動が生活習慣や言語の違ひから、不可避的に種々な葛藤關係を生ずることを描いた。作者は葛藤の糸綜を摘出し混淆不清の雜滓を剔除し、更に一歩を進めて最良善の黎明を出現させようとし、滿洲新文學の題材に於ける先河を開き、滿洲人文社會の歸趨を兆示

發行所　會社　國民書房
電話二一三三八二振替新京一一〇

しようとした。作者はこのために確かに苦心したのだが、後半が故あつて完成し得なかつた、でも滿洲の現勢に害あるものでは決してなかつた。

最後は野鶴の「盲」で、これまで軍事小說を書くことで有名だつた野鶴が、今度は新作風で、動搖する社會と男女間の愛情の紛糾を詳しく指摘した、筆路は大衆小說の形式に近かつたが、文藝の範圍たるを失はなかつた、少くともその物語叙述の故に。

以下、滿洲の新聞紙の文藝副刊を一瞥しよう。文藝副刊は今日では、もはや昔日の滿洲新文藝を助長した底力を失ひ去つてゐる。原因は國內弘報新體制に伴ひ、紙面を縮少し、停止せざるを得ず或ひは減じねばならなかつたからに外ならぬ。斯くて、新聞紙の文藝版は、かかる傾向の下に、消沈の一途を顯示した。

しかし、その中で昨年、なほ言及し得るものに、大同報の「我們的文學」、同報の「新文壇」及び盛京時報の「文學」の三者があつた。外には、大北報の文學版の取消、及び泰東日報文學版の完全は通俗雜要化したこと等、均しく新聞紙副刊文學が最大の刼運に遭つた一年であつた。各地方新聞が小型となり、地方文學者の活動を容るべき場所が無くなつたこと等も、否定出來ない滿洲文壇全體の一損失であつた。

斯くて、「我們的文學」「新文壇」「文學」の三つについて語る外ない。

大同報の「我們的文學」は昨年の一月から四月までに合せて七期出た、前年「我們的文學」が始まつてから合計して三十一期の壽命であつた。その後は發展解消の運命に面した。それについては、吳郎が「閑話滿洲文學十年」と題してその所以を說明したことがある。

昨年僅か七回出た「我們的文學」は在京文壇の士を動員し、全力を發揮して經營したものと言へた。それは記念すべき作品が極めて多かつた。就中、雜文隨筆に於いてさうであつた。吳郎の「去年滿洲文壇回想記」、爵青の「書齋隨想」、古丁の「談」等である。創作方面では冷歌の「人群」、小松の「柴米」等があり、詩と散文では田瑯の「綠色的靈苔」、冷歌の「山洪」、外文の「迎新年」等があつた。

この外、滿洲文藝家協會が九年一月十八日、文藝家愛國大會を開いた際、該刊は特に專號を發行して、この意義ある行事を記念した。それは滿系文學者の時局認識を具體的に表現したものであり、また文藝者の時局への初陣でもあつた。この特輯には、大會宣言、決議文の外に、爵青、吳郎、疑遲、小松、山丁、外文、金音氏等が執筆した。

「我們的文學」の發展解消の後を繼いで、昨年九月一日、張羅氏の主編する「新文壇」が大同報

發行所 會社 國民書幸社
電話二一三三八二振替新京一一〇

に出現した。これは四日毎に出る文學副刊で、發刊の初めに讀者への挨拶もなく、讀者はこの文學の外衣を着て突然出た副刊に、妙な感じを抱いた。がその壽命は今日まで延びて來てゐる、主編者が相當に滿洲文學に對して靱力的充進を揮つてゐることが知られる。

「新文壇」は一般に文學青年倶樂部的な傾向に入つてゐる、大體に新進の、或ひは潛心的な文學青年を主體とし、理論及び小品散文が多く、記憶すべき作者に之白、良意、方思、高揚、遲鏡誠、高揚、慈燈等があり、その中には好評だつたものも乏しくなかつた。

ただ期日が短い關係（出版に）で、編者が發稿の際に、より嚴しくやる暇がないためであらう、時には低調な作品も出現した、甚しきは一篇の文章に、思想が統一されず、技巧も錬れてないものがあつた。この點は改善せねばなるまい。滿洲の文壇のために、若し週刊か半月刊に改めたら、その效果は現在の陣容よりずつと好くなるであらう。

主要な評論は、大體一致して明朗な性格の文學を創造することを希望した、これは喜悅の文學とその論調はあまり差がなかつた。だが惜しむらくは事に就き事を論ずる現實性を缺いてゐた、殊に架空的に東亞文化を討論した一論一駁は、愈よ讀者をして迷宮に趣入させた。だがその中で爵青の「滿洲文學管見」、之白の「今日文學作品的技巧論」は誠に二つなき作であつた。

文學的動力を缺いだ活動は、ただに「新文壇」がさうであつたのみではない。私は我々共同の課題であると思ふ。一つの文學副刊を活潑にし火と熾んならせることは、亦實に滿洲文學を前進せしめる一辦法である。「新文壇」の行事として十月の滿華文人一夕談があつた。これは武德報社編輯部長柳龍光氏の來滿を機會とし盛會を現出した。更に大東亞文學者大會滿洲代表歸國の際に、列車座談會を催した。華中、蒙疆及び滿洲の各代表が大會に出席しての意見を網羅し、特刊を出した。

我々は「新文壇」が今後一歩を進めることを、更に嚴肅に進むことを期待する！

盛京時報の文學版は、毎週一回で、突擊的性格の文學副刊である。その主力は時事的評論で、雜誌の文藝作品、一小說集が出ると、直ちに批評が出る。斯くして滿洲文藝の前進を輔導する。それは意義ある事で、盛京時報文學版の一大特色である。

それから、編者が滿洲文學に貢獻した事項がある。譬へば數回連載された谷實の「滿洲新文學年表」及び同氏の「建國十年滿洲文藝書提要」等、ともに編年體の史實を煩はず詳述したもの、滿洲新文學史に絶大の史料を提供したものであつた。

該刊は主に文學短評を原動力とし、傍ら詩、小品文、文學題答、文學紹介等に及んだ多光多采な內容で、殆んどみな地元の文學の當面の問題と關係あるもので架空的高論と違ひ、そのため文學を

發行所　會社　國民畫報社
電話二一三三八二　振替新京一一〇

熱愛する者の好評を博し、當代滿洲の最も好き一文學副刊と認められた。

記憶してゐるものに「關於通俗小說」なる泰東日報との論戰、滿洲の大衆語の問題の檢討、最近滿洲に流行してゐる所謂「實話小說」への論及があり、その他短評は均しく鋭利で利刄の如く、言骨を刺し、全滿洲文藝界に對して、縱橫の忌憚無き批判を加へ、何れも當面に最も求められ、現社會環境に最も適合したものであつた。

該刊の理論上の主要な作者には田川草々、陳因、覩葵、吳郎、秋螢等があり、詩及び散文には吳瑛、山丁、林緩、田瑯、未名、勵行建、爵青、成弦等があり、紹介方面には歐陽萬舞、袁意、林靖があり、譯文は林鼎、明朗等がある、ともに文學工作に努力してゐる人々である。

最後に、文壇での特殊な行事について書こう。例へば滿華作品の交驛、滿洲童話特輯の發行、及び詩運と譯文界の活動狀態等である。

先づ華北作家協會が滿洲文藝界に推薦した華北の八作家の作品、その內容は張金壽の「匡超人」公孫嬿の「未繡完的牡丹」、慕容默文の「初春散記」、幻鷗の「我的童年」素靜の「風沙夜」、東方雋の「養子」、程心扮の「靴域」、蕭菱の「噴吶」で、前後して『新滿洲』四卷七、八兩月號に發表された。

華北の作品についての認識と批判は滿洲で相當に旋潮を捲き起した。多くは張金壽等八氏の寫作意識に不滿であつた。殊に盛京文學版の水旅、石卒等は徹底的に痛擊を加へた、その中で石卒は「私が見得たものは何であるか？或るものは塡詞をよくし月琴彈く佳人を描いてゐる、……或るものは身邊瑣事の隨記で、既にして不健全な行進であり、更に個人的哀愁に限られてゐる……ここから我々はこれは完全に題材の紊亂に陷つてゐることを規納し出す……これら華北の作家は、迷途を模索し、書くべき方向が何處に在るかを見付け得ずにゐる……」（「華北的文藝」）と言つてゐる、これは滿洲の大部分の評論家を代表した意見であつた。

それはまあ實際の所であらう、だがこの八篇にはやはりその特別の長處があつた、小說、散文ともに沖淡雅嫺な作風に滿ちてゐた。細膩な描繪、微に入つた刻畫は、粗な線條で長を見せてゐる滿洲の作品には決して見られぬものであつた、同樣に滿洲の作品の渾雄豪邁は、華北方面ではなかなか見出し難いのである。ここで、我々はすでに華北、滿洲の文藝が今やそれぞれの路を進んでゐることを見得る。

なほ滿洲文藝家協會から華北へ送つたのは爵青、小松、吳瑛、勵行建、疑遲、杜白雨、金音、劉漢等八氏であつた。

發行所　會社　國民畫報社

以下、滿洲の童話について概說を試みよう。大體、滿洲の童話の發育は、これまで他の文藝各部門に比べて跛行的であつた。だが去年以來、滿洲童話界は聲威を奏樹した。作者あり、なほ專門に童話を執筆した作家がある。こゝに我々は慈燈を紹介すべきであらう。それは眞に孜々として滿洲童話に奉仕してゐる者で、彼はすでに二冊の童話集を出してゐる。『月宮裏的風波』はこの年に出たその童話集であつた。

現下の滿洲童話界は、四種の型態を具備してゐる。一つは文藝童話の徑でメルヘンへの抗議たるもの、一つは全くメルヘンの意味でいきいきとした「兒童讀物」を書いてゐるもの、一つは情操教育の任務を負ひ教育思想を混へた、兒童文學童話の途に入つたもの、最後は寓話文學で、新しい寓話を創作して我々現代人の感情を寄託し、哲學的源泉、教育的輔俾より發したものである。

今、未名、慈燈、謫人、古弋四氏を代表として擧げ得る。そこでこの四人の力作で「滿洲童話輯」と題し『新滿洲』四卷十一月號に發表した。かかる企圖は滿洲童話界に不拔の地位を樹立したものであつた。因つて特に記して置く。

詩運の勃興を繼承した前二年は、今や甚だ凄凉憐れむべきものとなつた。「詩」は冷落の段階に擲げられ、新聞紙の副刊、雜誌の補塡の用となつて、顯らかに又夕陽の歩伍に歩み入つた。新聞紙上、「我們的文學」には冷歌の「山洪」といふ長詩が出たが、外には賭るべき作品は少なかつた。これに對し『新滿洲』は「滿洲詩作介紹」なる一欄を設け、冷歌、雷力普、魔女、崔伯常氏等の詩作を登載した。だが惜しむらくは規模小に過ぎ、衰退に趨入した詩の命運を補ふ所がなかつた。だがこれに反し詩集の批評は、盛京文學版にはいろいろ出た、陳因の「季季草」や「青色詩抄」の評等の如きである。

最後に譯文界は亦特に低調を呈した、藝文書房は曾つて日本文學全集を問はうとしたが、結果は儒馬、文華の譯した谷崎潤一郎集以外は、再刊印されず、『新滿洲』は昨年掉尾に「日本文學介紹特輯」を行つて、この一年來の貧しい譯文界を點綴した——（十二、廿二）（大內記——吳郎君の譯文界についての記述は些か遺漏がある。藝文書房からはなほ島崎藤村集などが出てゐる。）

なほ『新青年』は年末に、新裝號を數ケ月の休刊の後に發行した通卷一三〇號である、疑遲「氷流」石軍「非超人」、也麗「綠洲」第一回等、石軍、金音、老翼、勵行建等の「私と文學」特輯等を載せてゐる。

書き來り、こゝに至つてなほ遺漏の少くないことを思ふ。が、枚數の關係もあり、一應こゝで擱筆しよう。

追記

この原稿を書き上げたのは去年の春であつた。その後、一年以上が經過した。その間に數多くの物故者が出た。

堀井正一　アッツ島で戰死
晴山昌勝　昨年病死
横澤宏　蒙疆で病死
遠藤美津男　昨年病死
加藤正　昨年夏病死
川島薫　昨年秋病死
陳（姜靈非）奉天で昨年病死
城島舟禮　本年三月新京で逝く
高原富士郎　同じく新京で急逝
李心炎　本年七月病死
蘇正心　本年八月病死
藤井圖夢　本年春南方で戰死

敬んで冥福をいのる。

なほまた、多くの若人たちが長期出張してゐる。彼等ははげしい戰の場に在りつつ、劍光銃影の間に在つてその文學魂を錬りつつあることであらう。切にその武運長久を祈る。

今年七月二十九日、私はこの本の出版者與一君とともに大連にゐた。そして警報下、相携へて地下室に入り待機した。その時に持つてゐた亡友加藤正の遺品たる白扇に書きつけた小詩をここに抄して驕敵覆滅の誓ひの記錄とし、且ついま大東亞の各地にたたかふわれらの同志の健闘を祈願しつつ本書を了ることとする。

われらまた戰場に在り

七月二十九日
南滿戰場と化せり

發行所　會社　國民書房

われとの日　大連に在りて

二時間餘を地下にゐたりき

遠く又近く

砲音傳はり來れり

眦を決して

われら　敵打倒を誓ひき

老いも若きも

悠々として防護團指揮下に行動したりき

女子また戰列につき　餘裕綽々たりき

われらまこと必勝を信じ勝ち拔かん

一刻の後　街は平靜にかへり

整然と市民動けり

巷頭を賽る赤き花の鮮かなるが

烈日のもと眼に沁みたりき

勝利へ

ひたすらに勝利へ

われら

われらの全力を獻げむ

昭和十九年九月五日

大内隆雄

發行所　會社　國民圖書株式會社
電話二一三三八二振替新京一一〇

著者略歴

本名は山口愼一、明治四十年福岡縣柳河町に生る。大正年代より大内隆雄の筆名を用ひ來つた。昭和四年、東亞同文書院卒。滿鐵本社（情報課、經濟調査會）新京日日新聞社を經、現在は滿洲映畫協會（現民映畫部）文藝課長。滿洲文藝家協會委員。大同劇團文藝部長。滿洲雜誌社編輯長。滿洲國編譯館責任者。住所　新京特別市曙町二ノ一六。

著書に『支那研究論稿』『支那革命論文集』『滿洲文學二十年』、小說『或る時代』、評論集に『東亞新文化の構想』、譯書に『原野』『蒲公英』『平沙』『石軍沃土』『綠なす谷』『黃金の狩き門』『歐陽家の人々』等がある。

康德十一年十月一日印刷
康德十一年十月五日發行

（三、〇〇〇部）

定價 ㊀ 五圓

出協會員番號一〇〇三
出協承認番號 二一二

著者　大內隆雄
株式會社國民畫報社取締役社長

發行人　奥一
新京特別市吉林大路五〇三

印刷人　津島七郎
新京特別市吉林大路五〇三

印刷所　滿洲軍援產業株式會社

配給元　滿洲書籍配給株式會社
新京貴長春大街一一〇

發行所　株式會社　國民畫報社
電話二一三三八二振替新京一一〇

著者略歴

國民畫報社文學書

北方の歌	2圓50錢	青木實	短篇集
歸心	2圓50錢	北村謙次郎	短篇集
野狐	3圓50錢	北尾陽三	短篇集
烏爾順河	3圓50錢	長谷川濱	短篇集
阿片戰爭	3圓50錢	楳本捨三	長篇
アロー戰爭	2圓80錢	楳本捨三	短篇集
タルチユフ役者	3圓50錢	楳本捨三	戲曲集
圃花	3圓30錢	工清	短篇集
滿洲渾沌記	3圓30錢	工清	短篇集
石牌樓	2圓30錢	冬木羊二	長篇
凍原の記	2圓80錢	日向伸夫	短篇
縣城	3圓00錢	神戸悌	短篇集
娘々祭の頃	2圓20錢	山田健二	童話集
韃靼みやげ	2圓20錢	岡田文枝	紀行集
縣城の空	3圓50錢	上野市三郎	農村集
歐陽家の人々	3圓50錢	爵青	譯集
滿洲文學二十年	5圓00錢	大内隆雄	文化史

滿洲を代表する作家